

第一二七話

洛中大風日吉神託事

『前太平記』上 卷第十九 三八八頁から三八九頁より

同年（永延三年）八月七日、急に空が曇り、つむじ風が激しく吹いて^(老)、都の白川^(貳)の周辺の家々がひっくり返ることのその数は分からない。だんだん風が強くなって、宮城の宮殿諸門はすっかり壊されていないという所も無く、棟も木ばりを吹き飛ばすこと、木の葉が散るかのように、これを食い止めようと思って立ち向かった者はこれが打ち付けられて腰骨を痛め、かわいそうな目を見る者が家々にいて、ひどかった有様である。それゆえこの凶事にあつて、都のうち、周辺の寺社がたくさん倒れ壊れた有様で、神職法務^(参)は、和幣を献上し神楽を奏で、神の御心を穏やかにし申し上げる。その中でも、日吉大宮^(肆)のお告げがあるとして、神職たちは連署^(伍)を献上して、帝に申し上げたことは、「はてさて昨日の大風で、神殿もついに破損した。これゆえに、神の怒りを宥め申し上げる為に、神楽を奏で申しあげましたところ、神が乙女の袖に託し（→乗り移り）おっしゃることには、『そもそも今回の凶事は竜神魍魎の祟りではない。西の山に鬼がいて、巧みに幻術を操る。つまりその者の仕業である。案の定思い当たるはずだ。次に源頼光の鎮守府^(陸)の任務のこと、当分このことを後回しにするのがよい。もしあの方が辺境のとりでに向かうのならば、鬼どもがついに好機を得て、きっと朝廷の災いになるだろう』

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

と申し上げてうつ伏せに倒れ、戦慄しすぐさま物の怪を解放しました。非常に神託が靈驗著しく思われ、奏上に参りました」と申し上げた。参着したばかりの諸卿は不思議なことに思いなさったが、摂政の兼家が手を叩いて、「はてさて頼光の奥州への任務のことは、紛れもなく私の胸の内において、それでいてまだ私の口を出さないことで、このように神仏が不思議な力でお示しになることの、神託は改めて疑うところはない」と大変驚きなさり、すぐに多くの人々と評議し、「まず年号を変え、災いを消滅させるのがよい」と言って、永祚に変えられ、頼光朝臣の赴任のことも当分おやめになったと耳に入った。

注釈

※壺・永延三年八月七日、急に空が曇り、つむじ風が激しく吹いて……「永祚の風」のことか。永祚元年（989年）八月に起こったとされる大風。日付は一般には八月十三日とされる。

※貳・白川……京都市左京区を流れる川。

※参・法務……僧綱所の長官。

※肆・日吉大宮……滋賀県大津市にある元官幣大社。

※伍・連署……二人以上が並べて署名し、花押を書くなどすること。

※陸・鎮守府……陸奥・出羽両国の蝦夷を鎮圧するために置かれた役所。

「酒顔童子退治」の始まりです。永祚の風や、この時期に実際に兼家は摂政だったようですので、こうした歴史的事実が伝説と関連付けられていることが非常に面白いです（まあ永祚の風に関しては時系列おかしいところ有りますが）。

この話は頼光公が実際には登場していないのに、その力量が優れ、神々からも信頼されていることが伺える描写がとても好きです。そういえば、頼光公って酒呑童子や妖怪関連以外の作品に登場する場合、みんな性格が異なるんですよね。いつか『古事談』なり『今昔物語集』なり訳してみたいと思いますが、英雄としての顔を持つ頼光公と、逸話としての頼光公の顔が違うのは不思議ですよ。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m()m

公開：2017/4/23

改訂：2021/3

海熊童子